

a. 須藤淳「鳥（トリ）の語源—形態か意味か」

b. 須藤淳氏の質疑に答える手紙

『長田夏樹論述集（下）』第37章

（原載：『水門—言葉と歴史』第10号，1977年4月；第11号，1978年8月）

1976年6月13日に「水門の会」再発足に際して開かれた長田教授談話会での論争点を須藤淳氏が『水門』10号に公開書簡形式でまとめたものが a であり、それへの答えが b である。須藤氏の論は、端的に言えば、*tōri* の対応語を *tark* から *sai* へと修正して以降の長田説への反駁である。疑問の要点は以下の通りである。日朝祖語形として建てられた **sari* の第2音節初頭子音が何故 **r* でなければならないのか、語頭子音の日朝対応は *s : s*, *s : t*, *s : ∅*, *s- : y* 等々さまざまである。以上2点は、最低限その語形再構を支えるさらなる根拠の提示を求めたものである。また、独英両語間の *Vogel : fowl*, *Tier : deer*, *Knabe : knave*, *Weib : wife*, *Hund : hound* のような「意味のずれ」はあり得ることであり、「鶏」と「鳥」の差も意味の特殊化、一般化で説明し得るとする。須田書簡はさらに *tark* の遡及形を **teri* とし、南広祐氏の「**ter*（月）との同音衝突回避のため、慶尚道以外で[k, g]が挿入された」との所説をその根拠としつつ、**teri : tōri* の対応を提示している。

これに対する回答書簡では1959年以来、繰り返し述べられてきた日朝基語形再構の根拠が述べられている。ここに再び細部を論じないが、煎じ詰めれば、*sai < *sari* で第2音節に **r* が再構されるのは、正に日本語が *tōri* であるため、ということに尽きる。常のごとくアルタイ諸語の語形が参照されるが、語頭子音の再構も同段である。末尾で *tōri* と *terk* は「擬似対応」であり、*terk* は「カケ」に対応するとしている。

須田書簡 **teri* を、南広祐説の[k, g]挿入と併せて批判し、本来 *-k* はあったとする長田書簡における所説は、その後活発に論じられた朝鮮語史における「*C₁vC₂v / C₁yC₂y*（アクセントは平平、*C₂*はsonorant）～*C₁vC₂+牙喉音 / C₁yC₂+牙喉音*）」という大問題とかかわる。*terk*, *xerk*（土）の *-k* が挿入でないことは長田書簡の通りであるが、「一日 *xere*」は **hAt-Ar*（*-Ar* は類別数詞「日」の接尾辞）に遡及するものである。（伊藤英人）